

第11講 一九八〇年三月十九日の講義 (pp.289-314)
生者たちの統治 コレージュ・ド・フランス講義 1979-1980 年度

レジュメ担当：食パンぱん子

【前回の講義内容】 (p.289)

- 古代における指導の実践そして良心の検討についてごく概略的な指摘をしておいた。
- 良心の検討とは、指導実践において、指導される者と指導する者の蝶番のような位置を占めている。というのも、根本的には良心の検討は、指導される者への手がかりを指導者に与え、個人だけが自分自身に、そして自分自身から出発して行使できる、個人の認識を指導者に供すべきものだからです。

【本日の講義の内容】 (pp.289-314)

- 第一に確認したいこと (p.290, 1.4)
 - プラトンの主題であれ、また思弁的、理論思想、神学的思想はたまた道德的主題、日常的道德の主題の構造であれ、古代の哲学の主題は、ごく早くからキリスト教思想に浸透しており、その明らかな痕跡はすでに聖パウロに見られるのですが、それに対して、指導的実践、良心の検討の実践など、哲学的な私生活の諸技法そのものと呼びうるものがキリスト教に浸透したのはかなり後のことです。 (p.289, 1.6-p.290, 1.3)
 - キリスト教の文献において良心の検討が4世紀以前に参照されることはないということ。
 - 具体例** アレクサンドリアのクレメンスの『訓導者』 (p.290, 1.7-p.291, 1.2)
→自己認識が必要視されているが、それによって知るのは事故ではなく神であり、自己の内の神的なもの、神的なそのものを知ることを可能にしてくれるもの。
 - 具体例** 3世紀後半の聖アンプロシウスの考察 (『詩篇』)
→良心の検討に似たようなものはない
 - 指導という事実そのもの、というよりはむしろ指導の制度化、指導のための技法の配備はキリスト教においてはかなり後代になって現れる。
←司牧制は指導ではない。
 - 具体例** アレクサンドリアのクレメンスの『救われる富者は誰か』 (p.292, 1.6-p.293, 1.17)
→救いを得ることを妨げるような、様々な困難 (富や力) にぶつかると、その者は導き手、すなわちクペルネーター、彼を指導してくれる人を必要とし、そしてアレイプテース、闘技の師のような誰かを必要とする。この導き手、闘技の師が行う活動をクレメンスは、監視する行為、エピスタテースタイと定義。
しかし、これは古代の指導とはおよそ異なるものである。導き手は結局のところ、神の前における、そして神に対する代理人、証言者、身元引受人、保証人である。苦行のわかちあいであって、振る舞いの指導ではない。

具体例 使徒ヨハネの物語

→ヨハネの犠牲的な代理の過程において、聖ヨハネがその魂を神に捧げようとしたから青年が救われる。

- 引用したすべての場合において、問題はセネカやストア派の哲学について前回お話しした良心の検討や指導や古代のモデルではなく、また続く数世紀における指導や霊的指導や良心の指導ではまったくありません。(p.294, l.6-10)
…4世紀に急激に転換する

- その時に、セネカに見られるような、また17世紀から18世紀に至るキリスト教の伝統において見られるものに近い良心の検討が出現する(p.294, l.11- p.295, l.8)

具体例 『アントニオス伝』での聖アナタシオス(4世紀)

→「毎日我々は各自、日々の行為、日中の行為、夜間の行為を自ら検討し、隣人にさらけ出すかのように、各自、自分の行為と心の動きに気を配り、書き記すこと。」

具体例 ヨアンネス・クリュソストモス

「僕たちに問う、適切あるいは不適切に消費されたものは何か、どれだけ残っているか、と。私たちの人生の振る舞いにおいても同じような手続きを踏むべきだ。私たちの良心を呼び起こし、その行為や言葉や思考を報告させよう。」

- 厳格で明確な制度的な形式において指導が再び現れ、キリスト教に導入され、移し入れられ、導入されたのは、4、5世紀以降にすぎません。

- **要約** (p.295, l.11-16)

→ある種の逆説的現象がある。

- プラトンの・ストア派的哲学の主題が早くからキリスト教に浸透しました。それに対して、哲学的生活の技法は4世紀以前にはほとんど現れません。
- それ(哲学的生活の技法)が新たに導入され、復活し、キリスト教に取り入れられたのは修道制の内部であり、またそれを原因としてのことなのです。キリスト教一般ではなく、修道制においてこそ、哲学的生活の諸技法が復活し、一また、これは当時の異教の哲学では行われていたわけですから一、キリスト教に移入されたのです。

● **なぜ修道制だったのか、救済と完徳** (p.295, l.17)

- キリスト教における根本的な問題は救済と完徳の関係であった。
＝救われる者の完全性を含まないような救済宗教をどのように打ち立てることができるのか。
- キリスト教徒は、非完徳における救済宗教です。キリスト教の偉大なる努力そしてその偉大な歴史的特殊性は、救済と完徳を分離しえたことにありました。
- 救済と完徳の隔たりにおいて、そして完全でなくても自らを救うことができるという原理によって、隣接して並行していると同時に、反対の対立する方向へと向かう二つの制度が発展した。

- 第一は悔い改めです。というのも、罪に脅かされた人生、罪に墮ちることもある人生を通して、救いの効果、救済の業の効果、キリスト教の救済的な犠牲の効果、救済の表徴としての洗礼の効果などを維持されてくれるものだったからです。悔い改めは実存の非完徳における救済の効果をもたらし、それを維持させてくれるのです。
＝「罪を犯し続けるとしたら、救済をなおどのように維持できるのか」
- 修道制の方も、完徳と救済の隔たりにおいて発展しますが、その機能は逆でした。…救済の組成（エコノミー）において、完徳の生活を、というよりはむしろ完全生への錬成（perfectionement）を展開できるのか、展開するにはどのようにしてなのか、ということだったのです。
＝救済の構成において、完徳はなお何を意味するのか
- 悔い改めと修道制、これらは並行し隣接する二つの制度として、しばしば干渉し合います。修道制はある程度まで悔い改めの生活です。悔い改めの実践そのものがその歴史の過程で修道制から多くの要素を借用しています。
- 完全な生活の特徴、修道生活の目的（p.297, 1.4）
 - したがって修道制は、完徳の生活、というよりはむしろ完全制へ向けて錬成する生活であり、完全な生活に向けた歩みです。
 - 完全な生活の特徴
 具体例 アンキュラのニロスのある文献
 「この完全な生活において、エートーン・カトルトシス、すなわち素行や存在容態を正すこと、錬成することであり、それはトゥー・オントス・グノーシス・アレテーース、すなわち存在するものの真の認識が伴う。」
 →素行が清められ、生活様式が正されて掟にかなうものとなったとき、同時にそしてそれによって、存在するものの真の認識に至ることができる。
 ＝修道生活の目的・完全な生活の目的・哲学的生活（素行を正すこと・存在を認識すること）
 - そしてだからこそ、修道制はごく自然にそしてさらなる問題を提起することなく、たちまち哲学的生活として定義されたのです。修道士であることと哲学者であることは同じことです。
- 第一の原理（p.298, 1.4）
 - 立ち止まって考えて見たいのは、キリスト教における古代の哲学者に固有な技法の展開と変容です。
 - 具体例 カッシリアヌスの文献『共住修道制規約』『靈的談話集』
 ・模範に言及し、戒律も説明するが、これがどう機能するのか、修道院ではどのような生活が行われているのか、それが何の役に立ち、そしてこの戒律の体系がどのように働いて、修道士のヒロイズムの頂点に立つことができるのかということを示す。
 →「私たちの素行の矯正や、完全な生活を送る方法」を説明しています。

…この視点からすれば、これはおそらく、修道制の内部において、古代の人間がすでに定めていた哲学的な生活実践がどのように練り上げられ、どのように変容していったかを理解するために最も良い文献だと思われます。

- 第一の原理：指導がなければ、修道生活もありえない
- 修道生活の意味＝①修道士（砂漠に個別に住むもの）の修道生活 ②修道士同士ないしは共住共同体があり、その下で戒律にしたがって生活をしていた
- 修道士の孤立した個人的な修練生活が、不信の目で見られるようになる→修道生活に節制（レジーム）を設けるような戒律の体系を定めるように
→もし指導されず、指導者と根本的な関係を持たなければ、修道士に、良い修道士にはなれず、墮落や再墮落の危険から逃れることはできない
＝指導なければ修道生活なし
- カッシリアヌスの文献から見えること（p.300, l.11）
- ①修道士（砂漠に住むもの）について
 - ・あらかじめ師の指導のもとに訓練を受けずに砂漠に出発するのは問題外
 - ・一人の師ではなく、至る所に範を見出し、特定の美德で有名な複数の指導者に次々と身を委ねる必要がある。
 - ・砂漠に引き籠ろうとする者は、まずは共住修道すなわち共同体で研修することから始めるべき。
- ②共住修道院や共同体の場合
→3つの契機を通過しなければならない
 - (1) 修道院に入る前の10日間
 - ・エクスペリエメントウム：試練（悪口を受け入れる忍耐力を持っているか、課せられるすべてのことを受け入れる能力、従順さを試す）
＝パティエンティア、オボエディエンティア（従順）、フミリタース（謙遜）
 - ・衣服や財を剥ぎ取られ、もはや修道院に依存しないと生きていけなくなる（もはや自立できてはならない）
 - (2) 修道院の入り口での1年間
 - ・僕となる能力、奴隷すなわちファミルスとなる能力
 - ・フミリタース（謙遜）やパティエンティアも示さなければならない
 - ・一定期間の研修の間、「師の配慮」、研修者が心を傾けなければならない師の心遣い、そしてそのエールディーティオ（教える方法、教える術）を受ける
→この2つのことは、主に2つのことを目指さなければならない
 - ① 「入門者が自分の意思に打ち勝つよう教えること」
 - ② そのためにも、命令を、多くの命令を、それも入門者の性向にできるだけ反するような命令を与える。従順にするため、己の意思に打ち勝つために、この性向を逆流する→従順さを教える
 - ・初心者には、偽りの羞恥心から、自分の心を苛む考えを隠さないこと、このような考えが生まれた瞬間に語ることを教える。初心者は「師にその考えを現す（マニフェステ）」ことが必要
 - (3) （責任者によって統治される10人に加わっている段階）

キリスト教の主体性を、つまり西洋の主体性を構成するものに形を与える一連の実践や装置全体の核心 (p.304)

→以下の2つに義務が対にされ、結合し、接合している

すべての点において従順であること

何も隠さないこと

→あるいは以下の原理を一体化させること

「自分自身では何も意志しない」

「自分自身について全てを語る」

- ここには、主体、他者、意志、言表の間の実に根本的な装置と、実に特殊な関係がある。
 - 自己と他者と意志と言表の間に打ち立てられ、そこで働く技法、そして、他者に従順で、自己自身について全てを語ること、こうしたことについてこの講義と次回の講義でお話ししようと思うわけです。
- すべての面で従順であること (p.304, 1.9)
 - 古代の哲学的生活や古代の教育における指導は、修道制やキリスト教において展開する指導とは根本的に異なっていた。
 - 古代の哲学的生活や古代の教育の3つの特徴 (p.304, 1.14)
<非キリストの指導、異教の指導>
 - ① 従順さの目的は限定されたものであり、従順さに対して外的なもの。人が指導者に従順なるのは、それが情念から解放され、苦痛に打ち勝ち、亡命や没落の恨みを統御し、不安定な状況から脱出することを可能にしてくれるからだった。従順さは道具的だった。
 - ② 師がある形の能力を備えていることを前提としている。指導者と被指導者の間には一種の本質的な差異がある。
 - ③ 指導は一時的なものである。その目的は、指導者がもはや必要でないような段階へ、自分自身を導き、自分自身に対する至高の指導者となるような段階へと導くこと。
 - <キリスト教的指導>
 - 一時的であることについて
 - …根本的に一時的ではない。
 - ・ 長老という言葉、老人という言葉は、実は指導するのに十分なほど進歩している者、助けや保護を求めうるほどの聖性を身につけていると考えられている者のことを指す。
 - ・ 指導者や長老であったとしても、完徳に向けて長い道りを歩んだ者だとしても、それでもなお再墮落の可能性をまぬかれえないということ。最後まで不安定なのです。
 - ・ 従順さは、一つの状態である。(具体例：生涯逃げ回ってまで従順さを求めたピヌフィウス司祭) 指導の普遍性、指導の限ない恒常性という原理。人は人生の最後の日まで指導されるべきなのです。

- 師の能力 (p.307, l.3)

…師の能力には基づかない

・誰かを指導したり導いたりするには、理論的・思弁的な意味での知識、つまり厳密な意味での適正という意味での知識は必要なかったのです。

・修道制において指導は、師という厳密な資格をほんとうには前提としていなかった。

(具体例：棒に花を咲かせるため1年間水を遣る、息子を川に投げ捨てる)

・重要な点は、形式的な構造における従順さの関係が、それ自体で造作的な価値を持つという点。ディダスカリア（教えの内容）とオーペレイア（指導関係の有益な効果）の区別。

→命令がどんなに馬鹿げたものであれ、命令が与えられ、それに人が従い、従順であることが必要なのはなぜか。

…従順さが従順さを生み出すから。

・従順さはあらゆる命令に先立ち、命令という状況より根本的な存在容態である。

・従順さという状態は、いわば他人との関係を先取りする。他人がいて命令を発す得る以前に、あなたはすでに従順さの状態にあり、そして指導が機能するための条件であると同時に、指導の目的なのだといっても良いでしょう。(=奴隷?)

→従順さと指導の循環

・カッシリアヌスがあげる、従順さについての3つの特徴 (p.309, l.10)

① スブディティオー

→意味が二つある

1) 修道士が自分で行うすべてのことについて、会則や上級者や仲間、そして起こりうる出来事に従わなければならない。修道士は、命令に満ちた世界に生きるのです。

2) 命令的なものであれ、許しを与えるものであれ、他者の意思がそこになくってはならないのです。

② パティエンティア

→意味が2つある

1) 受動性、非抵抗、命令への非無気力

2) 耐久力、抵抗する力、耐える能力（命令ではないもの、それに反するもの、そこから生じる耐え難い帰結などに対するの真の不屈さ）

③ フミリタース (=謙遜)

・謙遜=自分をできるだけ低いところに置くという自己へのある種の関係のこと
→2つのことを意味する

1) あらゆる他者に対して自分をできるだけ低いところに置くということ。あらゆる他者に対して自分は劣っていないてはならない。だからすべての点において他者に従い、他者に仕えなければならない。

2) 単に他者より下に身を置くばかりではなく、同時に自分を取るに足りないものとみなし、自らの意思 (=何かを欲してしまう権利) を貶める。

- オボエディエンティア（従順さ）の構造には三つのものがある（p.312, l.12）
 - ① スブディティオー＝従属
 - <自分は他者が欲することを欲する>
 - 他者たちとの関係一般
 - ② パティエンティア
 - <自分は他者以外のものを欲しないことを欲する>
 - 外界に対するある態度
 - ③ フミリタース
 - <私は欲したくない>と語る
 - 自己への関係

* 古代の指導の対極にある

- ストア派の指導では、個人が、他者や世界など、自分以外のすべてのものに対して、自己充足性や自立の立場を確立することが、指導において重要なことだった。
 - スブディティオーは、起きるもの全てに従うこと、全てが依存すべき命令となるような従属のこと。
 - 古代の指導の目的は、個人が情念の運動にもはや左右されないようにすること、すなわち、何らかの仕方自分を動揺させたり、害したりしうるものを何も経験しないようにすること。
 - パティエンティアは、他者たちに即座に反応すること、他者たちや世界に由来する苦しみや試練を、その最も強烈で、最も痛烈な地点において受け入れること。
 - 古代の指導では、自己統御によって個人が世界の秩序と交流すること、そして自らの理性に従うことで、同時に世界を律する理性に従うことを目指していました。つまり自分の主人であれば、ある意味では世界の主人でもあるということです。
 - 自分をすべての下に置き、何も欲しないようにするフミリタースは、自分が欲することを合理的に欲することによって、世界全体が欲しうることを欲するための自立の反対物。
- 次回の講義について（p.314）
 - 次回は哲学的な生活及び修道院生活のもう一つの側面について。
 - 全てを語る義務と、検討の技法について。